●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 5 - 8

# 問題行動

目次


要約・調査概要 2

1.子育てをふり返って 4

- 調査対象 …… 5
- 理想の子どもイメージ …… 6
- 理想と現実の子ども像のギャップ …… 7
- 子育てについての満足度 …… 8
- 学習面への期待と性差 …… 10
- 自分と比較して …… 10

2.子どもの問題行動 13

- 気になる問題行動 …… 13
- 問題行動の出現と母親の職業の有無 …… 15
- 性格的なことについての問題 …… 16
- 友だち関係(社会性)についての問題 …… 16
- 親子関係の面での問題 …… 18
- 基本的生活習慣にかかわる問題 …… 19
- 学習についての問題 …… 20
- 健康についての問題 …… 20
- 出現頻度の高い問題行動 …… 21

3.母親の育児不安をめぐって 25

- 育児不安について …… 25
- わが子の将来をめぐって …… 27
- 育児の情報源 …… 28
- もし登校拒否が起こったら …… 30
- 父親の役割 …… 32

まとめに代えて 34

シリーズ／講座・子ども調査入門 ⑳
時間の流れを追う …… 深谷昌志 …… 35

資料1　調査票見本 …… 41

資料2　学年・性別集計表 …… 48

# 調査レポート／問題行動

## 要　約

東京学芸大学助教授　深谷和子
千葉県総合教育センター所員　中原美恵

### ① 理想の子どもイメージ

だれからも好かれ、こつこつとまじめに取り組む子が、男子・女子とも最大公約数である。

図2　理想の子どもイメージ

### ② 理想と現実のギャップの大きさ

理想の子ども像と現実のわが子の間には、かなりのギャップが見いだされる。しかし、ギャップはギャップとして、多くの母親は、現実のわが子の姿を、まあまあ受け入れているようである。

図3　子ども像
図4　子育ての満足度

●子育ての満足度

### ③ 思いどおりにいかないのは学力面

親として思いどおりにならなさを感じているのは、学力に関わる側面がいちばん大きく、逆にほぼ思いどおりにいっていると感じられているのは、親子関係と健康面である。

図4　子育ての満足度

**調査概要**

1．主題　問題行動
2．概要　臨床心理の立場からみた一般の親たちのかかえる子どもの問題行動を探る。
3．対象　小1～小6の子どもを持つ母親 1,325名
4．時期　昭和60年4月～5月

## ④ 子育てに関する情報源はテレビや雑誌より、個人的なルートによるものが信頼されている

子育てに関して母親が最も参考にしている情報源は、先生の話や友人、親せきの人の体験談で、マスメディアによる情報は、思ったほど信頼されていない。

図21　子育てについての情報源

## ⑤ 夫に頼る育児

母親たちが、育児上最もよく相談相手とし、かつその助言者としての力量に信頼を置いているのは、夫(父親)である。また夫婦間で、よく子どものことを話題にする家庭ほど相談相手としての夫の力量への信頼があつい。

図22　頼りにしている相談相手

図26　夫婦の話題×夫への信頼

## ⑥ 敬遠される相談機関

子どもが問題行動を起こした場合ですら、できれば相談機関へ行きたくないとする母親たちの心情に対して、ＰＲ活動を含め相談機関のあり方についての見直しが必要だろう。

図24　もし登校拒否を起こしたら

● 育児の情報源

● 相談相手
もっとも頼りにしているのは夫

5．調査項目　母親の子どもへの理想と現実／子育ての相談相手／子どもの気になる問題行動／子育てでこまったことなど

6．調査方法　学校通しによる質問紙調査

# 1. 子育てをふり返って

ベビーベッドの中に無心に眠るわが子の姿を見つめながら、母親はあれこれとその将来の姿に思いをめぐらす。母親にとってそれは、生涯に数少ない「至福」の時なのではなかろうか。子どもの誕生とその後の子育てのプロセスは、いわばわれわれが、もう一度人生をやり直すために神が与え給うたギフトにも似ている。とり返しのつかない失敗と後悔の日日が人生というものならば、我が子の誕生は、もう一度われわれが生まれ直して、まっさらの人生を歩み出すことを可能にするかのように、希望にみちた輝きを放つ。

しかし子どもが成長するにつれ、その希望の光も、しだいにかげりを増してゆく。こんなはずではなかった、あの時ああしていればよかった、とり返しのつかない失敗をしてしまった、もう遅すぎるだろうか——親自身のこれまでの人生にくり返し体験した失意や失敗を、また改めて子育ての日々に体験することとなる。「親の歴史は失望の歴史」とだれかが言ったように、それは親として苦渋に充ちたものであろう。しかし、大方の親たちは時と共に、子どものあるがままの姿を受け入れるようになる。まあまあこれでいいのではないか。しょせん自分の子なのだから、この程度で仕方のないところではないか。いくつかは自分にない輝いた部分も持っているし、と。しかしその心境にたどり着くには、長い長い親の日々が必要であろう。

そのプロセスの中でも、とくに「問題行動」と名づけられるような、ゆがんだ発達の姿をわが子の上に見ることになる場合もあるかもしれない。その場合の親たちの驚きや焦りはいかばかりか。

われわれ両名は、クリニカル・サイコロジストとして、これまで問題をもつ子どもたちの治療や教育にかかわってきている。そうした子どもたちを扱いながら、クリニックに来談しない親たちは、子どもの上にどんな問題の芽を見ながら親の歴史を過ごすのか、に思

いを寄せることがしばしばだった。今回機会を与えられて、そうした、いわば一般の親たちの子どもの発達史（とくに問題行動の出現という角度からの）を探ってみることができたことを感謝している。

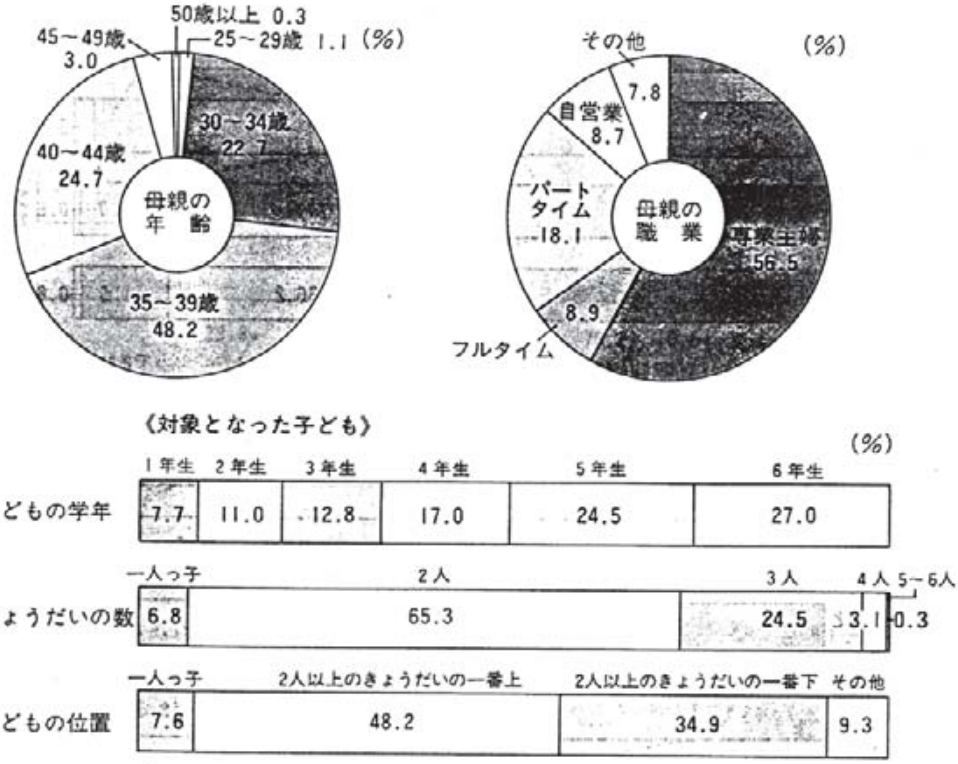
調査は学校通しでお願いしたが、回収率が極めて高く、子育てに対する母親たちの関心の強さを改めて感じさせられた。

## ■調査対象

小1～6年生をもつ母親
約1,500名

子どもの問題行動をとらえるにあたって、小学校1年生～6年生までの子どもを持つ母親約1,500名の協力を得た。ちょうど子育ての第一段階を終わり、いわゆる思春期の子どものとり扱いの難しさに直面する少し手前の時期。親としては比較的安定した時期の母親たちと言えよう。サンプルの属性については、図1に簡単にまとめた。年齢は、30代後半を中心にした構成で、半数を超える母親が専業主婦。フルタイムで働く母親は、1割にも満たない。また本調査の対象となった子どもの学年構成は、グラフの通りである。同一小学校にきょうだいが通学している場合は、上の子どもについて回答を求めているため、高学年がサンプルの半数を占める。子どもの数は2人が圧倒的に多く、子どものきょうだいの中での位置は、長子がほぼ5割。一人っ子の割合を合わせると56%となる。

図1・サンプルの属性



## ■理想の子どもイメージ

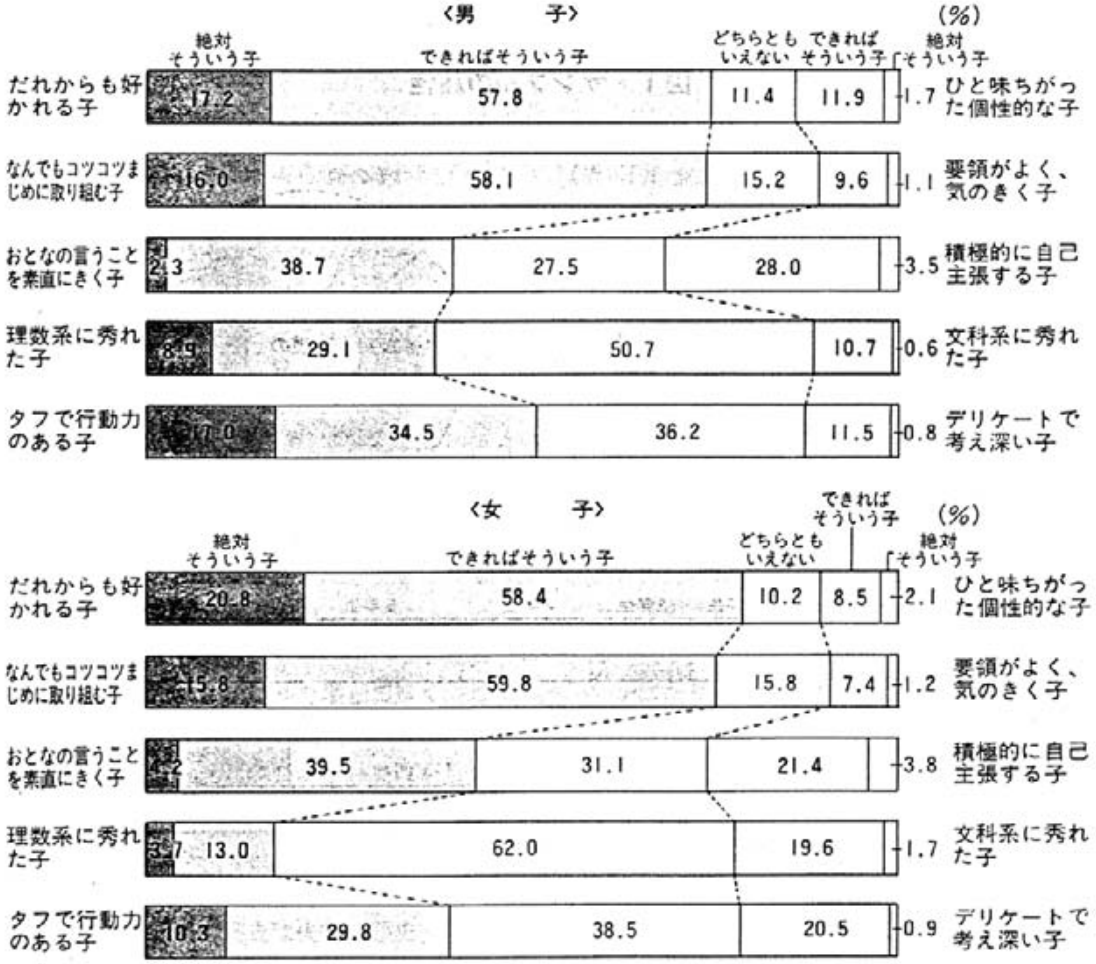
だれからも好かれる
まじめな子

子どもが小学校へ入学する。親としては、一つの時期を乗り切ったという感慨をもつと同時に、これから長い間つづく学校生活にむけて、新たな意気込みを抱く時期でもある。その後の小学校6年間の折々に、親たちは子どもの上にどんな発達の姿を見ることになるのだろうか。それを見てゆく前に、まず母親たちが描いてきた子どもの理想像についてとらえてみよう。

図2は、赤ちゃん時代に母親が理想とした子ども像を男女別に図示したものである。「だれからも好かれる子」「コツコツとまじめに取り組む子」をあげた母親が、4分の3にものぼる。個性の時代と言われる今日でも、個性の強さや積極的に自己主張できる子どもよりは、「素直でだれからも好かれる、まじめな子」を望む傾向は人びとの間で変わらないようである。さらにていねいに一つひとつの回答にあたってみると、挙げられた一対の形容詞の右か左か一つの選択ではなく、バラン

図2・理想の子どもイメージ

→だれからも好かれ、コツコツまじめに取り組む子



スをとって「どの面も兼ね備えてほしい」と願う親も少なくなかった。現実には、個性的で、かつだれからも好かれるというのは難しいが、親心としてはどちらの魅力も子どもに期待してしまうのだろう。

また、男子と女子に対して抱くイメージが、思ったほど差のない点も注目される。男子は理数系、女子は文科系に秀れた子を望む傾向と、男子はタフで行動力のある子、女子はデリケートで考え深い子を望む傾向にやや差がみとめられる程度である。

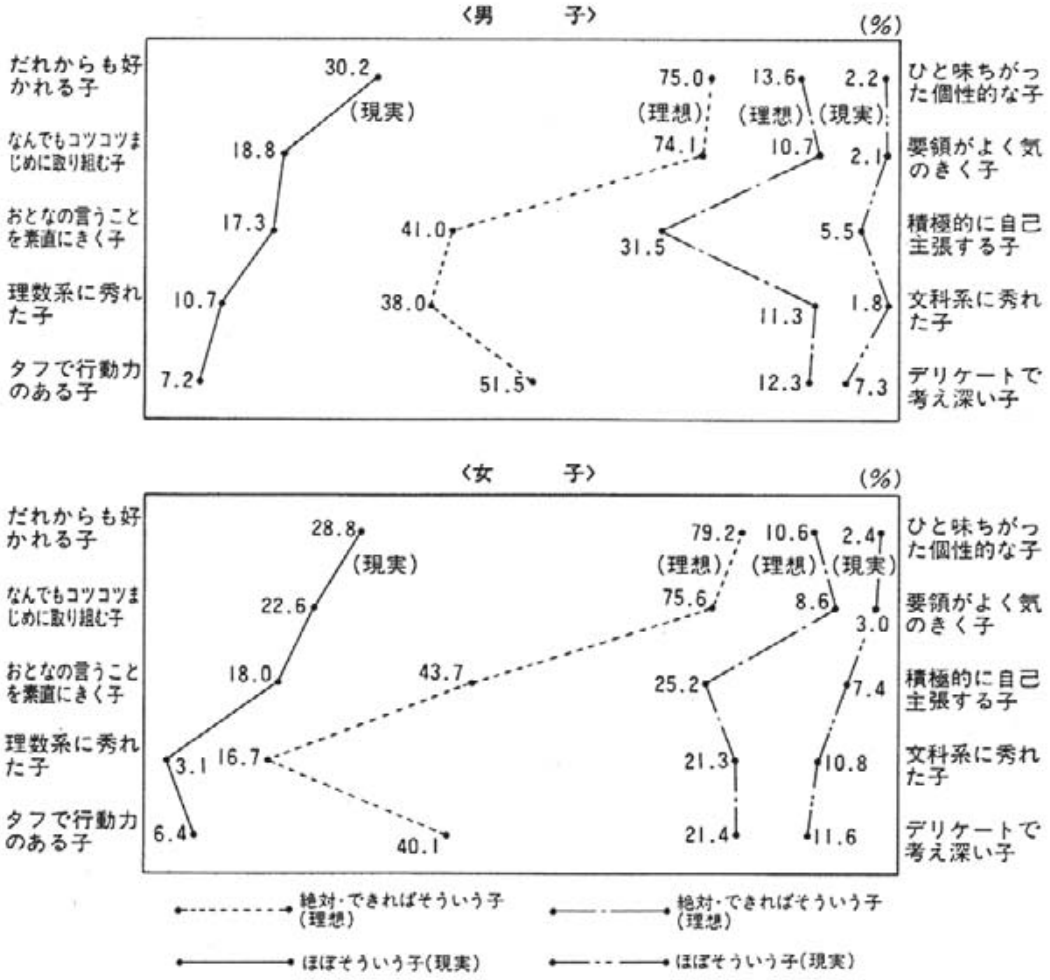
## ■理想と現実の子ども像のギャップ

理想と現実にはギャップ

では、こうした母親の期待に、子どもたちはどの程度応えているのだろうか。理想と現実の子ども像を比較したものが図3である。

「こんな子に育ってほしい」とする母親の

図3・子ども像 ——理想と現実のギャップ——



願い(⁚⁚)に対し、実線(——)で示された現実の評価はどの項目でも低く、大きなギャップが見いだされる。全体には、子どもの姿はどちらの形容詞にもあてはまらない——つまりあてはまる長所が残念にもみとめられない、という親が3分の2を超える。ときには、「個性的な子に」と願う母親のもとに「素直でだれからも好かれる」タイプの子が育ったり、またその逆もあるだろう。子育てとは、なかなか親の思いどおりにはいかないもののようである。

## ■子育てについての満足度

親子関係と健康面では思いどおり
勉強・才能・性格・生活態度面では不満

最善をつくして理想的な子育てをしてきたつもりなのに、目の前にいるわが子の姿は、かつて描いた理想像とは大きく食い違っている。では、母親たちはこれまでの自分の子育てが失敗だったと感じているのだろうか。いま、子育てをふり返って、それが親として満足のゆくものだったかどうかをみたのが図4である。①~⑦まで7つの側面についてみてゆこう。まず親子関係と健康の面では、ほぼ8割もの母親が「思いどおりにいっている」と大きな自信を示している。その他の側面も、この2つほどではないが、3割から6割もの母親が、「ほぼ思いどおり」と答えている。理想と現実との間に、あれほど大きなギャップのあるらしいデータをみてきたわれわれには、こうした高い割合の「ほぼ思いどおり」の反応は、少し解せない感じもあるが、先にもふれたように、たとえそれが理想の姿とは

図4・子育ての満足度

→思いどおりにいかないのは、学習面

違っていても、現実は現実としてまあいいではないか、という健康な現実肯定のメカニズムが表れてきているとみてはどうだろうか。

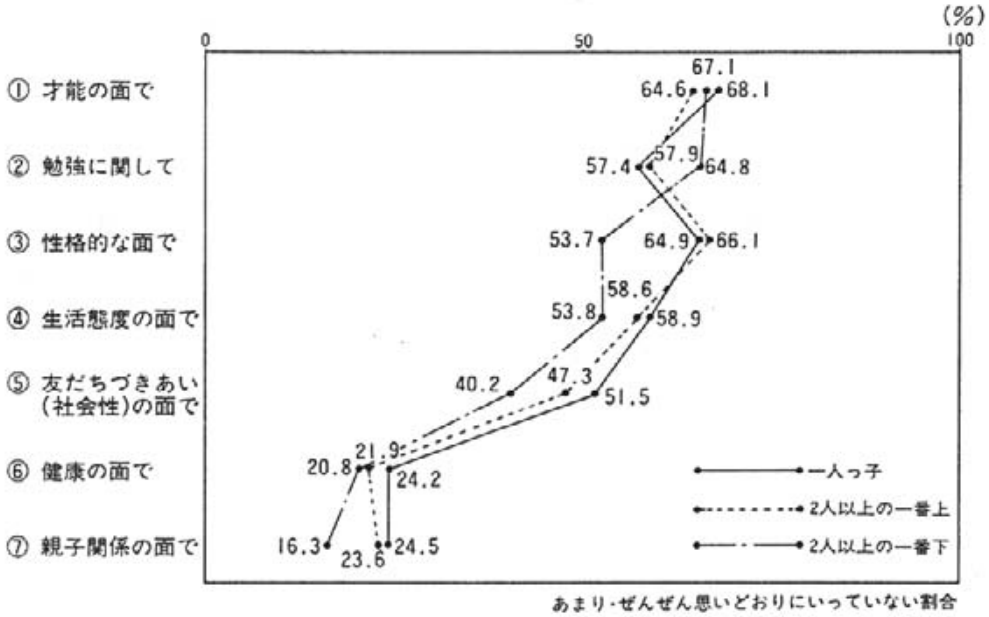
とはいうものの、少し目を凝らしてみてみると、やはり勉強や才能の面、性格・生活態度の面など、下位の項目では6割を超える母親が不満感を抱いているのも事実である。

子どもにかける親の夢は、子育ての現実の中で一つ二つと消されてゆく。「親の歴史は失望の歴史」、この言葉が、一段と重みを増してわれわれの中に入ってくるのを感じる。

さて図5は、そうした「思いどおりにいかなさ」が、子どもの位置(第一子か末っ子か)によってどう変わるかをみたものである。

一人っ子と長子と末子の間で思ったほどの差はみられないが、それでも若干親の受けとめ方に違いが見いだされる。一人っ子については、社会性の面で不満を感じがちで、また、複数のきょうだいをもつ長子は、ほぼ一人っ子と同様の傾向だ。強いてあげれば性格的な面への不満がやや高い傾向も見られる。どちらにしても、子どもの現実像に対して全体的に母親の不満が小さいのは、二人目、三人目といった末子にあたる子どもたちかもしれない。中でも長子にくらべ、友だち関係や親子関係の面では、ずっと安心して見ていられる存在のようだ。それだけ初めての子には、なかなか一人立ちさせられない不安を感じているということなのだろう。

図5・思いどおりにいかなかった面×子どもの位置



## ■学習面への期待と性差

男子をもつ母親は能力一本に期待
女子をもつ母親は勉強以外の側面にも期待

ではもう一つ別の角度から、データをみてみよう。学年・男女別にこれらのデータをまとめたのが図6である。図は6年生と1年生の母親の分を示してある。図が示すように、予想されたほどの学年差はないものの、それでも多少の傾向は見いだされる。図の中で、なんと言っても目をひくのは、「勉強」に関する側面で、学年が上がると男子・女子の母親とも「思いどおりにならなさ」が強く意識されるようになることがわかる。男子はそれでも、「才能」を除く他のすべての領域では、学年が上がると満足度が高くなる。もっともこれはわが子の現状に満足しているというよりも、現状を肯定する度合いが高くなる、と理解したほうが適切かもしれないのだが。これに対して女子は、男子と比べて多少違いがある。学年が上がると不満が大きくなるのが、勉強の面ばかりでなく、わずかだが、生活態度、健康、親子関係と多くの領域にわたっている。

男子の親は能力一本を期待し、他の側面にはそれほどの期待はもたないが、女子の親は勉強以外にも、さまざまな性格的・態度的側面への期待をもつことが推測される。これはおそらく、男子には人生を能力一本槍で生きてゆくことを期待するが、女子には、無意識のレベルで、どこか家庭人としての将来、社会におけるフォロワーとしての将来を描いていることによるのかもしれない。しかし、昔の親たちと違ってきているのは、6年生になると、「勉強」への「思いどおりにならなさ」がぐっとつのる。昔の親だったら、終始女の子には成績を期待しなかっただろう。6年生になると、男子にも女子にも勉強への期待が等しく強くなるのは、いかにも現代的な傾向と思われる。

## ■自分と比較して

自分のほうが手のかからない子どもだった

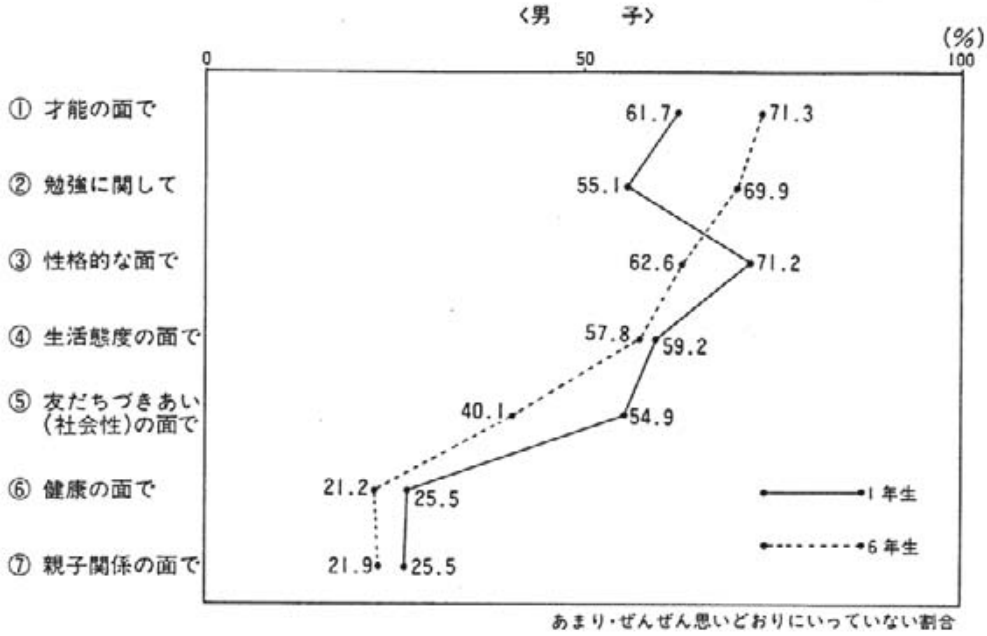
理想とのへだたりはあるものの、まあまあ子どもの現状を肯定している親たちの姿をみてきたところで、これまでの子育てをふり返った時のトータルな胸のうちをたずねてみよう。

図7によると、わが子をこれまで、「非常に親を心配させた子だった」「わりと心配させた子だった」と答える母親はごく少ない。「非常に手のかからない子だった」と答えた者こそ、男子で2割、女子で3割でしかないが、7割近くが「いくつか親を心配させたことはあったが、まあ手のかからないほうだった」と答えている。

事実図8にあるように、子どものことで専門的な機関へ相談したことがある親は、全体の3%でしかなく、多くの母親たちは、それほど深刻な状況を経験しないまま、子育ての一つの峠を越えてきたようである。

しかし、図7に戻れば、母親の胸の中には、自分のほうがもっと親に手をかけない子だったという思いがあるようだ。とくに男の子について、母親はそうした思いを強くもつもののようである。

図6・子育て上、思いどおりにいっていない面(性別・学年別)



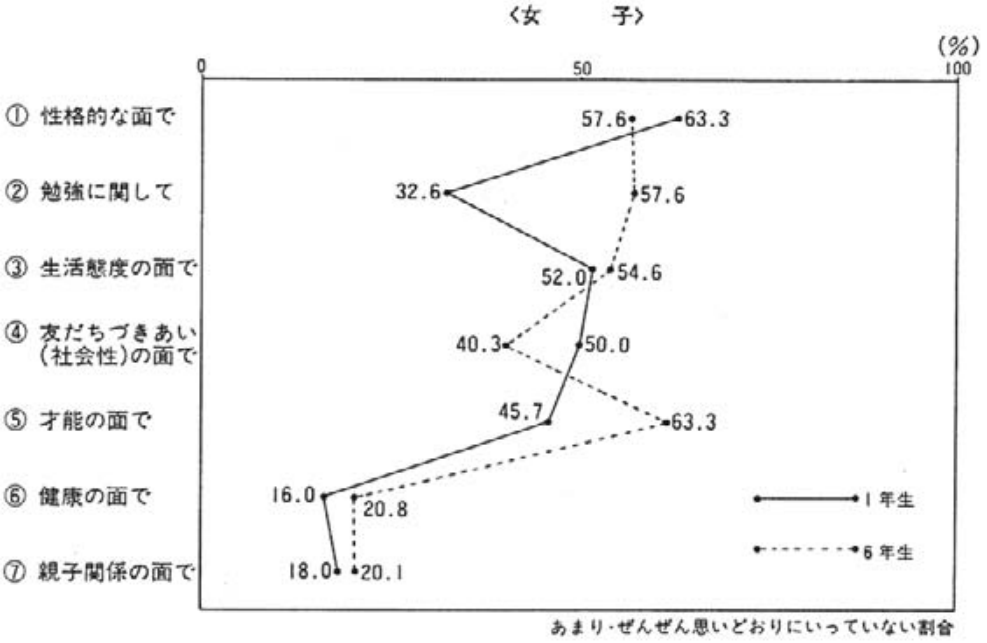



図７・母親の子ども時代とわが子との比較

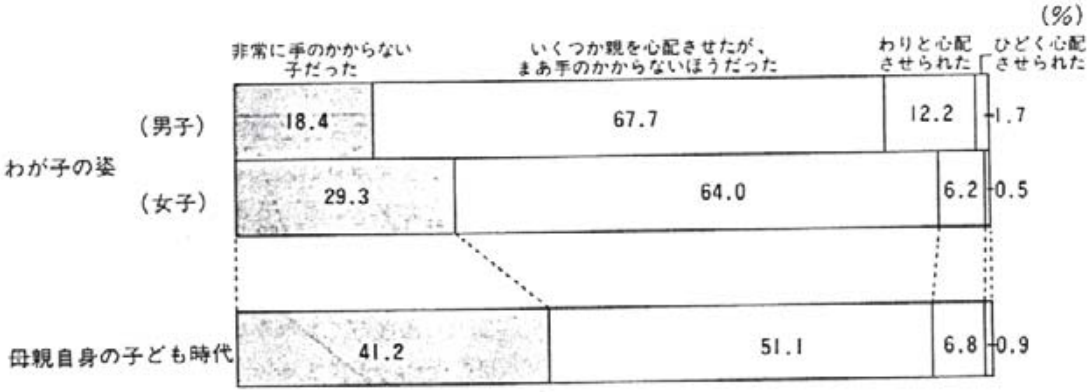
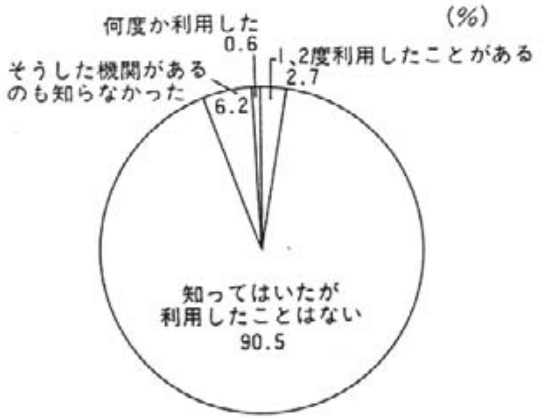



図８・専門的な相談機関に相談したことがあるか



# 2. 子どもの問題行動

登校拒否や非行をはじめ、さまざまな子どもの問題行動に日々接している筆者らの目には、前章の母親の姿は、子育てに際してやや楽観的すぎるのではないかとも映る。子どもたちは、本当にそれほどすくすくと順調に育ちつつあるのだろうか。

子どもが示す問題行動の出現率を中心に、このあたりを探ってみたい。

## ■気になる問題行動

登校拒否傾向の
出現率は1割

まず、子どもの問題に関する相談機関に持ち込まれる、幼児・児童期の代表的な問題行動を挙げて、「今、多少こまっている」・「前にあったけれど、今はなおってしまった」・「ほとんどなかった」の三段階でそれぞれ出現率をとらえてみた。図9は、代表的な問題行動10項目について、頻度の高いものから順に並べたものである。

全体的に、こうした問題行動を抱えてこまっている親子は、極めて少ないようである。せいぜい「ツメかみ」や「夜尿」ぐらいで、こじらせさえしなければ一過性に通り過ぎてしまう種類のものが多い。男子に多いと言われるチックも、現在こまっているのは男子4%、女子2%でしかない。また、近年社会的な関心を集めている登校拒否（その傾向も含む）の子どもは、全体の1%程度。この数値も他の統計とほぼ一致する。しかし「前にあったけれどなおってしまった」ケースも含めると、10%ちかくにのぼっている。登校拒否が、一時的にせよ、とにかく1割ちかくの子どもに出現している状況には、改めて驚かざ

るをえない。この問題は、20年前には、臨床家の間でもその存在すらほとんど知られていなかったのである。

ともあれ、問題行動としてクリニックでとり扱われるタイプの行動の出現率は、思ったよりかなり低いようである。その背後には、大事に至る前に、その芽をつみ取ろうとした親たちや先生たちの努力もひそんでいるのかもしれない。

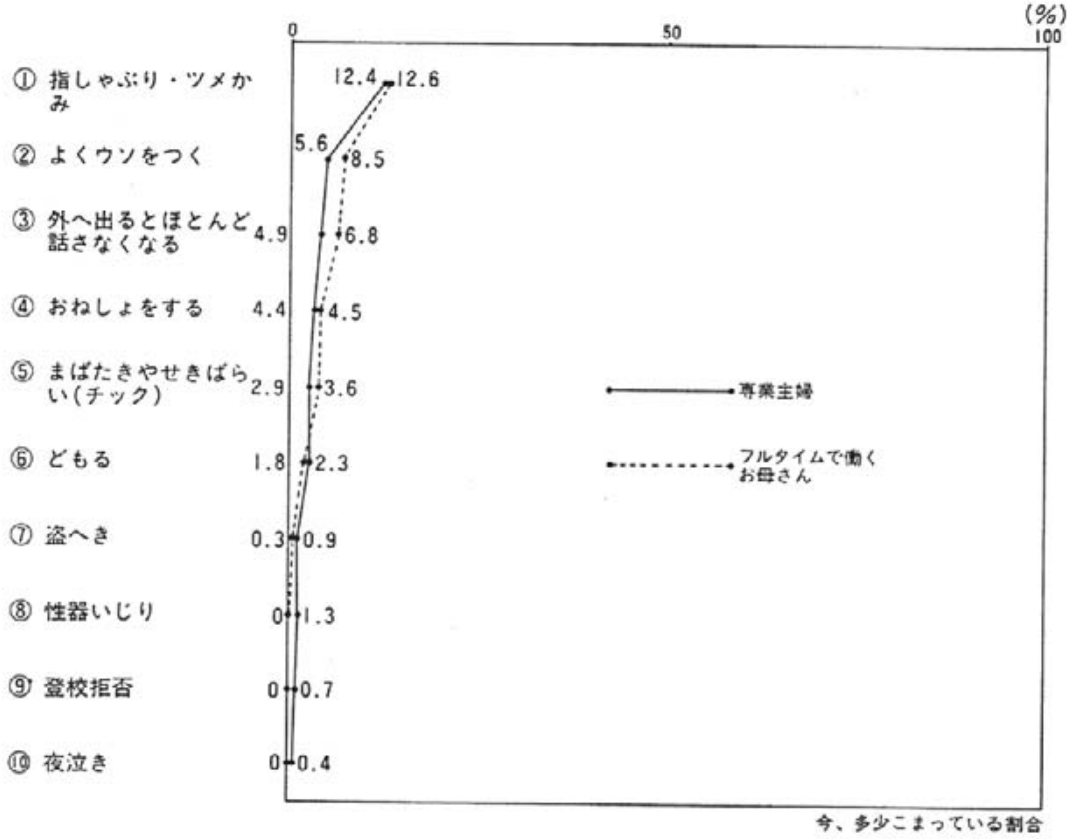
図9・気になる問題行動について

## ■問題行動の出現と母親の職業の有無

母親の就労とは関連ない

深刻な問題行動は、子どもを取りまく条件のいくつかが負に変わった時に、ＳＯＳの一つのサインとして現われるものとも言われている。そうした負の条件としてしばしば取り上げられるのが、「母親の就労」である。そこで図10は、問題行動の出現率が専業主婦の母

図10・気になる問題行動×母親の仕事



親とフルタイムで働く母親とではどれだけ違いがあるかをみようとしたものだ。

もともと問題行動の出現率が低いため、その差ははっきりしないが、全体として問題行動の出現率には、両群間にほとんど差が見いだせない。わずかに「よくウソをつく」「外へ出ると無口になる」が、多少働く母親の子どもに出現率が高い程度で、あとはほとんど差がないか、逆に専業主婦の子どもたちにやや出現率の高い傾向すらうかがえる。

働く母親が、クリニックに子どもの問題行動で来談する場合、たいていは子どもの問題の発生の原因を自分が外に出て働いているためと考え、自罰的となるのが常である。しかしこのデータでみる限り、小学校における問題行動の発生は、母親の就労とはほとんど関わりがないと推測される。

子どもの問題行動の発生は、一つひとつの要素ではつかみきれない、複雑な背景とメカニズムとをもったものと言えそうだ。そうした意味で、働く母親たちは、自分の就労に関していたずらに罪障感をもたないことを期待したい。

## ■性格的なことについての問題

**「すぐふくれる、わがまま」などの扱いにくさと「気が弱い、根気がない」などの頼りなさの傾向がある**

つぎに、問題行動の発生との関連も深い、子どもの性格的な側面について取りあげてみよう。前章の子育ての満足度についてのデータによれば、子どもの性格的な面については「あまり思いどおりにいっていない」と答える母親が多かった。図11には、そうした不満の具体的な側面があげられている。

内容的には、「すぐふくれる」「わがまま」「落ちつきがない」のような扱いにくさと、「気が弱い、根気がない、消極的」といった頼りなさを訴える母親が、全体の2～3割にも達していることがわかる。性格的に最も気にされているのは、対人関係上の問題点で、自由記述の中にも「こんな弱い性格では、いじめられっ子になってしまうのではないか」「社会の中で周りとうまくやっていけるかどうか心配だ」といった内容が目立っている。

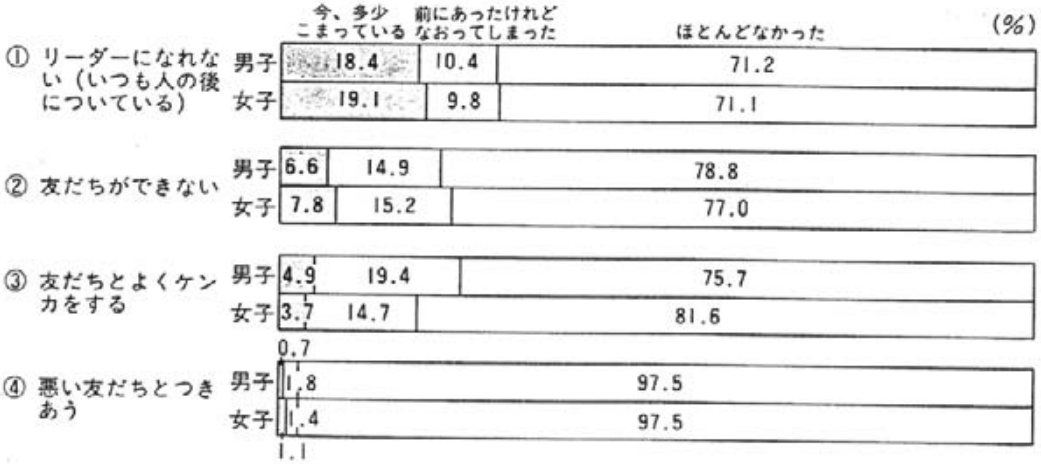
## ■友だち関係(社会性)についての問題

**どちらかというと非社会的問題がある**

では、現在の友だち関係については、どうとらえられているのだろうか。子どもの社会性に関するトラブルについて、図12の4つの項目についてたずねた。母親たちの心配ほどには、トラブルの出現率は高くない。リーダーシップを発揮できない、友だちができないなど、非社会的な面での問題点が挙げられているが、ケンカや悪い友人とつきあうなどの反社会的な面の訴えは、少ないのが特徴である。

## 図11・性格的なことについての問題

## 図12・社会性についての問題

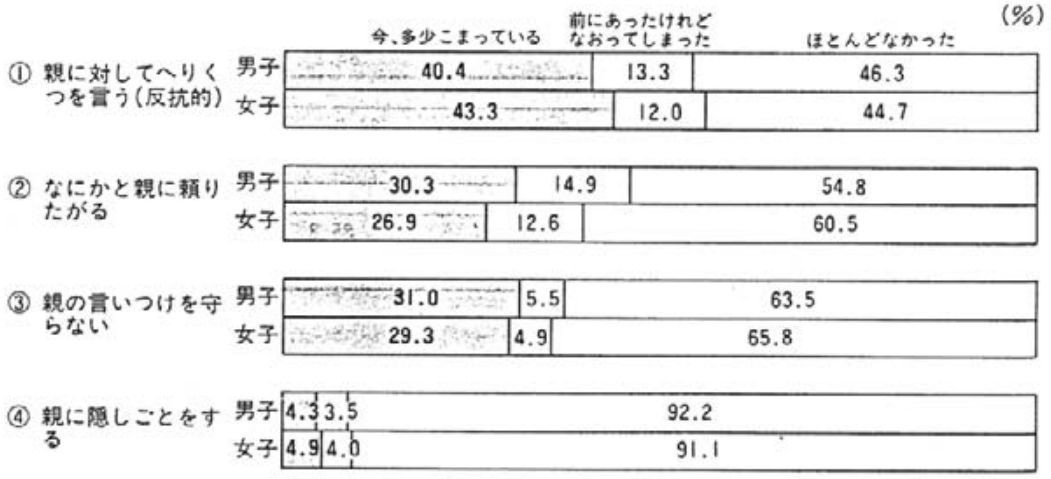


## ■親子関係の面での問題

親に対して
反抗的である

比較的問題のなかった友人関係に比べて、親子関係の中で、親たちが手こずらされているようすが見いだされる。図13が示すように、「親に対して反抗的でこまる」という母親が40%を超え、特に母娘関係でトラブルが生じやすいようである。図13の数値上ではそれほどの性差はないが、自由記述において女の子は、衣服の好み、食事のとり方、生活のパターンなどかなり自己主張するようになる。また、親の言いつけを無視する態度も出てくるので、扱いにくいという声が強くなる。反面、男の子については、「もっとしっかりと、自分で判断して行動できる子になってほしい」「親に頼ってばかりでこまる」といったひ弱さを心配する声が目立つ。これまでの比較的安定した親子関係から、子どもの成長につれ、少しずつ難しくなってゆく子育てのプロセスが反映されているようである。

図13・親子関係についての問題

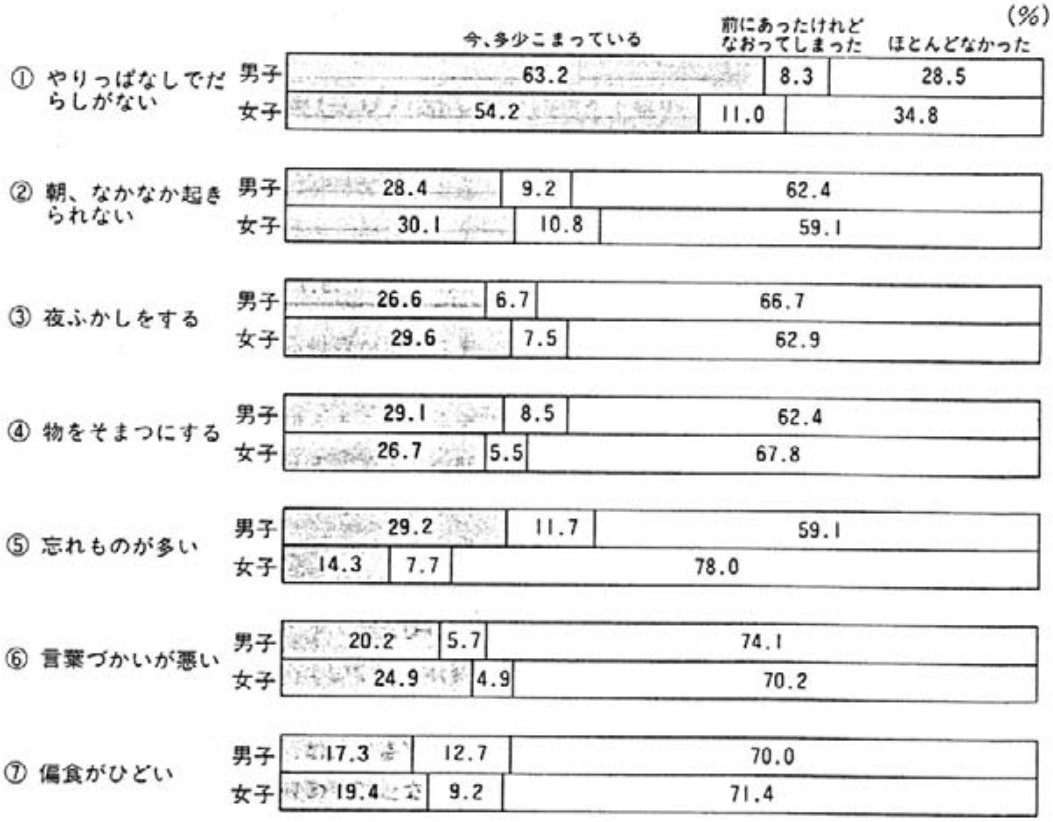


## ■基本的生活習慣にかかわる問題

やりっぱなしで
だらしがない

つぎに、これまでの子育てを通して行われてきたしつけの結果としての、基本的生活習慣の確立についてみてみよう。図14の7つの項目全体にわたって、「今、こまっている」と答えた割合は、これまでみてきたどの面の数値より高い。どれもおそらく口をすっぱくしてしつけてきたことばかりだろうが、思うような効果がみられないものらしい。「①やりっぱなしでだらしがない」は、6割ほどの母親が「現在もこまっている」と答えている。「前はだらしがなかったけれど、なおってしまった」と答えた母親が少ないのはおもしろい。こうした習慣形成の確立は、とにかく根気のいる仕事なのだろう。

### 図14・基本的生活習慣についての問題



## ■学習についての問題

女子より男子に
「成績が思うようにならない」

しつけの定着率が低く、態度形成が難しいという点では、学習に関する領域でも事情は同じようである。

図15によれば、現在、母親を手こずらせている問題の最大のものは、基本的生活習慣の形成と並んで、勉強をめぐっての問題であることがわかる。またどの項目でも、女子より男子にやや出現率が高い。

図15・学習についての問題
└→成績が思うようにならない

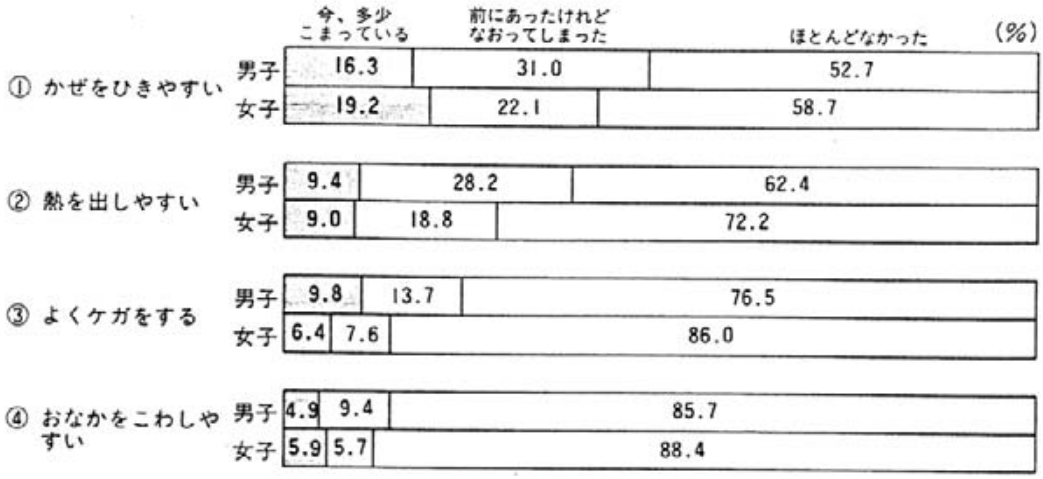
## ■健康についての問題

健康面では心配がない

最後に、子どもたちの健康面のトラブルについてみてみよう。

乳幼児期にかぜや発熱ではらはらさせられた体験は、ほとんどの親にとって忘れ難いものの一つだろう。昔から3歳、5歳、7歳が身体的な成長の節目と言い伝えられてきているが、図16からもさすがに、小学校に入学した子どもたちは、健康面ではほとんど心配がなくなってきているようである。「かぜをひきやすい」面が多少残っているくらいで、「今、多少こまっている」とする母親の割合は極めて低い。

図16・健康についての問題




## ■出現頻度の高い問題行動

基本的生活習慣のしつけがうまくいかない、学習成績が思わしくなく、反抗的になり始めた

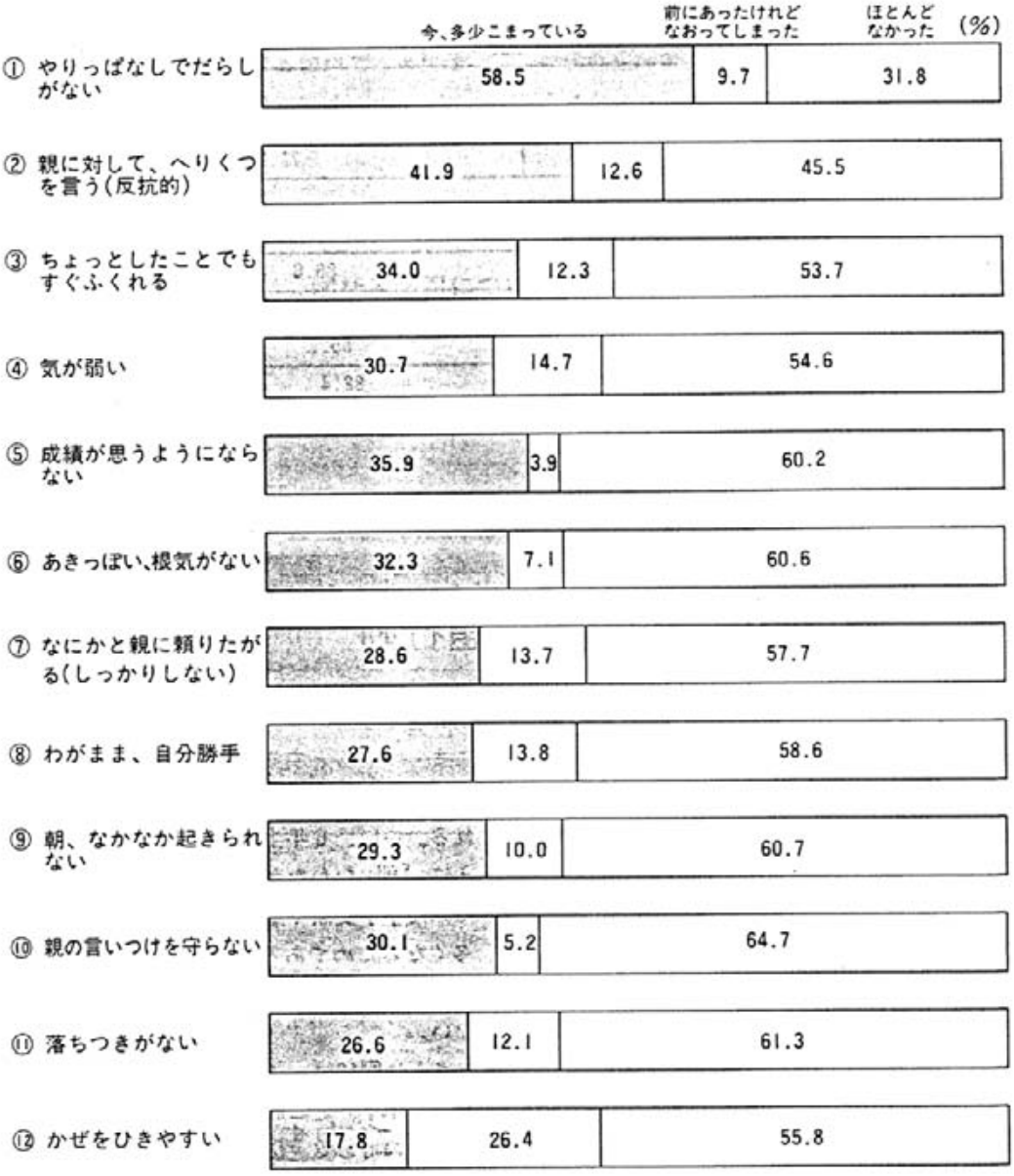
これまでいくつかの領域に分けて、子どもの問題の出現率をとらえてきた。最後に、全体を通して、最も出現頻度の高い順に12項目を抜き出してみた(図17)。

子育てのまっただ中にある母親が現在こまっている内容は、「基本的生活習慣のしつけがうまくいかない。学習が思うように進まず、成績も思わしくない。そのうえ、子どもが反抗的態度をとりだした」といった点のようである。幼児期にしつけるべき部分がうまくゆかず、残ってしまっている面（発達課題の達成の失敗）と、思春期に向かって子どもに芽生えてきている自我をもてあましている面(新たな発達課題への直面）が両存し、それにきわめて今日的な「成績競争」の波にあえいでいる、といった状況が、今日の母親たちの中にある特徴であろう。

また、この点に関して、学年別の推移をみたのが表1で、「今、多少こまっている」の割合を示してある。低学年とくに2年生に、こまっているとする母親が多く、高学年になると多少訴えが減少してゆく傾向が見いだされる。中に、6年生になると急に増加する訴えに、「朝、なかなか起きられない」がある。たぶん中学受験や進学をひかえて、勉強量が多くなるためであろう。しかし全体として、学年による推移はあまりはっきりしたものではない。

さらに図18は、子どもの位置（一人っ子、長子、末子）とこれらの問題行動との関連をみたものである。図が示すように、きょうだい中の位置に関わりなく出現するのは、「すぐふくれる・成績が思うようにならない・根気がない・朝起きられない」などの行動で、他は、一人っ子もしくは長子が、末子よりも問題を多くもつ傾向が表れている。「一人っ子はそれだけで問題である」「長男の甚六」などの言葉がそのまま表れたような数字である。

## 図17・出現頻度の高い問題行動



## 表1・頻度の高い問題行動×学年

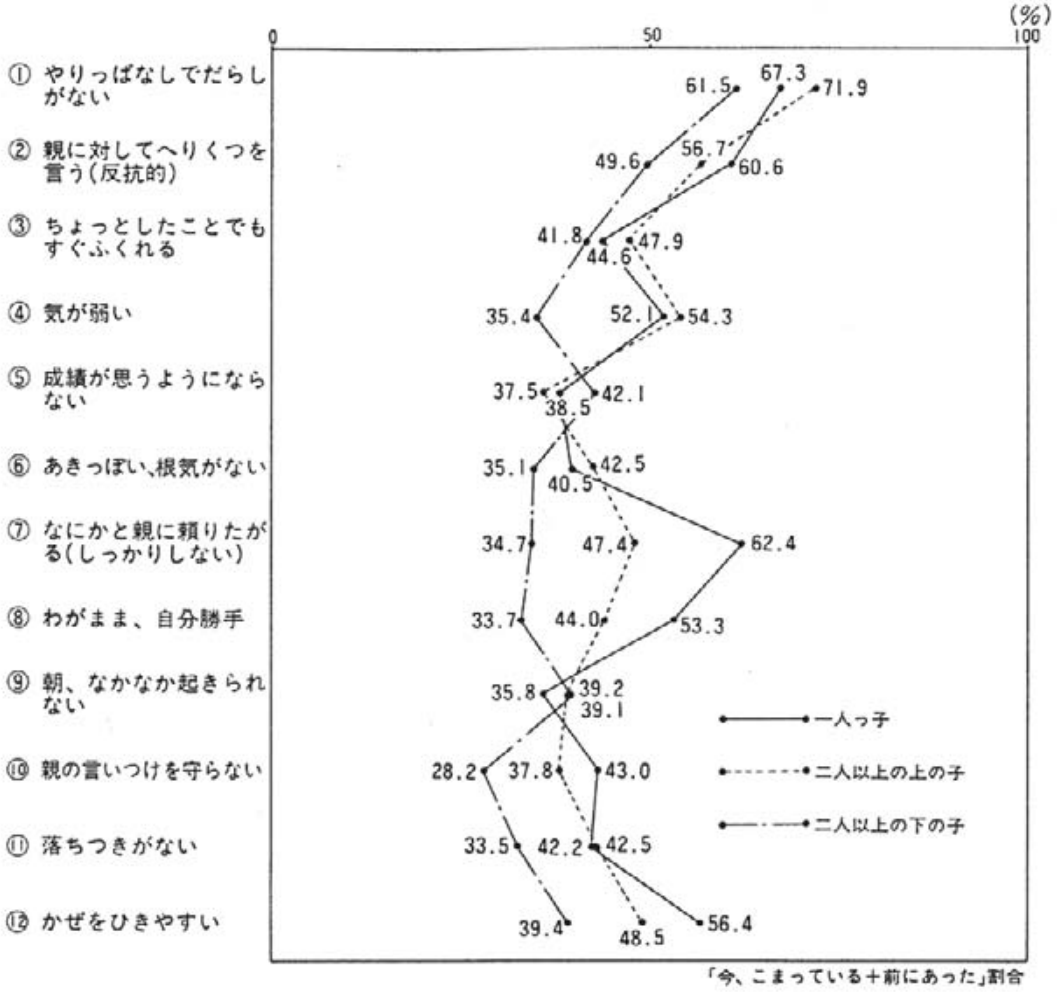
(%)

| 項目＼学年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ① やりっぱなしでだらしがない | 55.6 | 63.8 | (63.9) | 59.7 | 55.2 | 56.9 |
| ② 親に対してへりくつを言う(反抗的) | 42.3 | 44.3 | 38.2 | (47.6) | 40.2 | 40.6 |
| ③ ちょっとしたことですぐふくれる | 35.8 | (46.0) | 29.6 | 30.5 | 31.8 | 34.7 |
| ④ 気が弱い | (41.8) | 38.0 | 35.0 | 30.8 | 28.3 | 24.5 |
| ⑤ 成績が思うようにならない | 9.5 | 35.6 | 34.6 | (38.3) | 36.2 | 20.5 |
| ⑥ あきっぽい、根気がない | 34.7 | 37.5 | (38.3) | 25.2 | 30.0 | 33.3 |
| ⑦ なにかと親に頼りたがる(しっかりしない) | 31.6 | (35.6) | 30.7 | 25.6 | 30.8 | 23.6 |
| ⑧ わがまま、自分勝手 | 28.0 | (34.6) | 29.4 | 26.8 | 22.7 | 28.9 |
| ⑨ 朝、なかなか起きられない | 31.3 | 30.5 | 21.8 | 29.0 | 24.6 | (36.2) |
| ⑩ 親の言いつけを守らない | (38.1) | 36.8 | 33.7 | 33.6 | 24.7 | 26.3 |
| ⑪ 落ちつきがない | (36.7) | 34.3 | 33.3 | 25.2 | 22.5 | 22.0 |
| ⑫ かぜをひきやすい | (21.6) | 21.4 | 18.1 | 20.4 | 16.3 | 17.8 |

今、多少こまっている割合

◯＝最大値

図18・出現率の高い問題行動×子どもの位置



# 3. 母親の育児不安をめぐって

## ■育児不安について

適度の不安は
子育ての安全装置

子どもは親の思いどおりにはならないもの、子育ては難しいもの――そうした思いは、昔からどれほど多くの親たちの胸をよぎったことだろう。

本レポートでこれまでみてきた数字の中にも、理想の子ども像と現実のわが子の姿との間に距離を感じ、とくに才能や学力・性格などの面で、「親の思いどおりにはならないもの」とそっと吐息をつく母親たちの姿が、かいま見えていたように思われる。

このように子育てをめぐる親の迷いや悩みはつきないものの、と言ってそれは、日常的なしつけや教育のレベルに止まるもので、教育相談所を利用しなければならないような、いわゆる「問題行動」の出現までには、なかなか至らないものであるらしい点も、すでにみてきたとおりである。

しかし子育ての成否は、とくに人格の形成上、重大な問題が起きなければそれでいい、というものではない。それぞれの子育ての中には、それぞれの親たちの生涯を込めた願いが投影される。とくに、少なからぬ母親たちには、自分自身の自己実現を半ば断念し、子どもを育てることに置き換えよう、代理させようとしてきたプロセスがあるだけに、よりよき子育てを、という願いは、他の何にも増して強力な願いであるに違いない。

このように、願いが強ければ、それだけ不安も大きくなる。果たして自分がこの人生において、自らの自己実現を断念するほどの価値が、子育てにあったのだろうか。それに見合うほど子どもはうまく育っているだろうか。また将来にわたってうまく育ってゆくだろうか。こうした思いが基底にあって、いわゆる

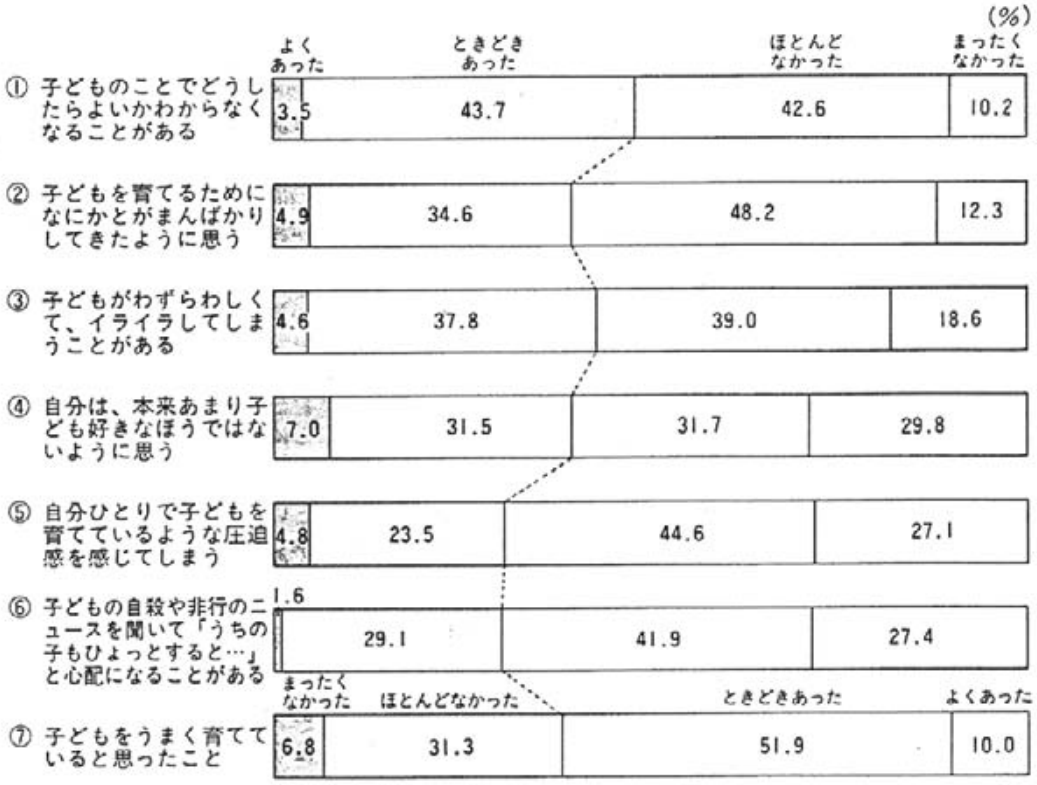
「育児不安」の状態が母親の中に生まれてくるのは自然のなりゆきであろう。

もっとも「不安」そのものは、人間の心の中に常に大なり小なり存在する。不安はそれが正常範囲内のものである限り、われわれが出逢うかもしれない未来の危険から身をまもる大切な役割を果たすメカニズムとして知られている。育児不安も正常レベルのものならば、それは育児行動を適切に導く道案内の役割をつとめるだろう。病気や死の不安があるから子どもの健康に留意し、転ばぬ先の杖として食事に配慮する、などの例がそれである。

しかし育児不安は、過度に働くと過保護・過干渉などの問題を生み出すことも知られている。こうした気持ちがどの程度母親たちの中にひそんでいるか。それをとらえようとしたのが図19の、育児不安項目である。どの項目においても3割前後の母親たちが「よくあった・ときどきあった」と多少の肯定をしている。

たとえば「④自分は本来あまり子ども好きなほうではないように思う」（ときどきも含めて）39%、「③子どもがわずらわしくて、イライラしてしまうことがある」42%などの数値は、世にある母性信仰に水をさす数字かもしれない。現実はこのように、さまざまな母親がさまざまな思いをこめて育児にあたっている。子どもからみれば、母親というものは、100人が100人とも、強くて暖かく信頼に足るビッグな存在であろうが、母親たちの間には不安や迷いもある。「⑦子どもをうまく育てていると思ったこと」に見いだされるように、折にふれて「自分はけっこう子どもをうまく育てている」と思いながら、自信をもって子

図19・母親の中の育児不安



育てにあたってきた母親は、全体の1割でしかない。とすれば、そうした母親の胸のうちを受け止め、何かにつけて相談にのってくれる存在（人や機関）が必要なことは言うまでもない。

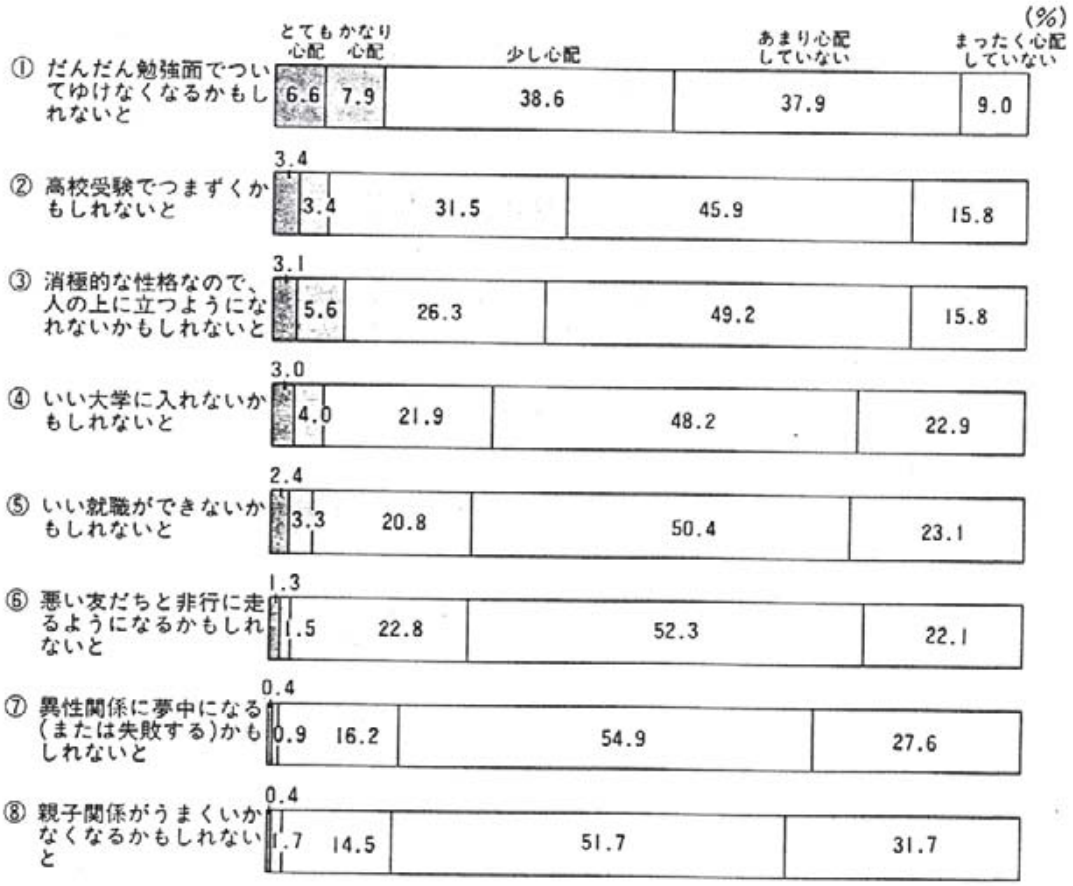
## ■わが子の将来をめぐって

学力面での先ゆきに不安をもつ

さてつぎの図20は、そうした基本的でばく然とした不安から、もう少し具体的なレベルの不安（心配や悩み）にまで、データの焦点をしぼってみた結果である。

図から、母親たちが現在、子育てにあたっていちばん感じている不安は、先のジャンル別の問題行動の結果でもみてきたように、やはり「学力」についての不安であることがわかる。中でも今の時点で「とても・かなり心配」している層は、それが遠い将来の可能性にとどまらず、すでに現在そうした問題で悩んでいる親たちとも思われるが、それが15%

図20・わが子の将来についての不安



もいる。それに「少し心配」を合わせると53%と、半分を超える母親たちが学力の先ゆきに不安をもっていることがわかる。関連した項目として、「②高校受験でつまずくかもしれない」38%、「④いい大学に入れないかもしれない」29%、「⑤いい就職ができないかもしれない」27%などの数字を見ていると、先にゆくに従って数字は低下するものの、現代に生きる親たちの不安な胸のうちをかいま見る思いがする。

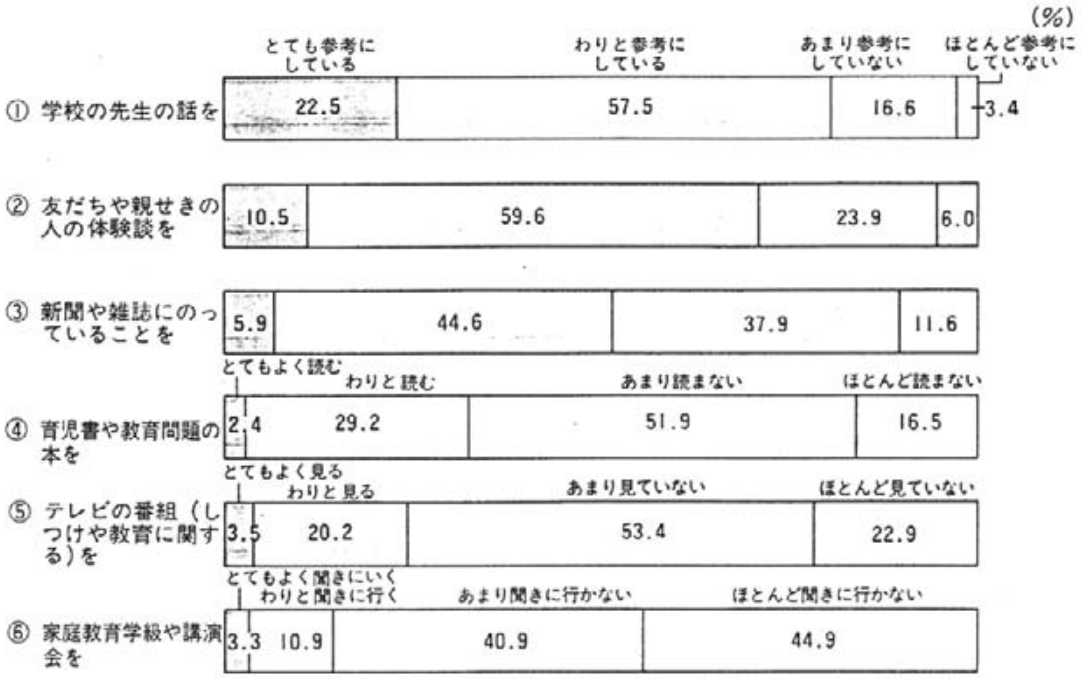
しかし、現在社会的な関心事でもある子どもの非行化については、7割以上の親があまり心配や不安をもっていないし、異性との関係についても、楽観的である。親子関係に至っては、8割以上が、心配をしていない。要するに、「学力さえ十分ならば」あとは子どもについて大きな不安も懸念も存在しないかのようである。だからこそいつの世も、親は子どもを育てられるのかもしれない。過剰な不安より、ややガードの甘い構えこそ、むしろゆったりとして適切な育児行動を導くものだとしたら、逆に現代の学力に対する過剰な不安こそが、育児不安上でも問題にされなければならないだろう。

## ■育児の情報源

「学校の先生」など個人的な情報を頼りにしている

さて親たちのそうした不安や心配が現実のものとならぬよう、適切な育児のためのノウハウは、どんな情報源によって、学習されるのだろうか。図21が示すように、母親から参考にされている1位は「学校の先生の話」、2位が「友人や親せきの人の体験談」と、マスメディアの発達した現代でも、やはり人びとが最も頼りにするのは、個人的なルートに

図21・子育てについての情報源

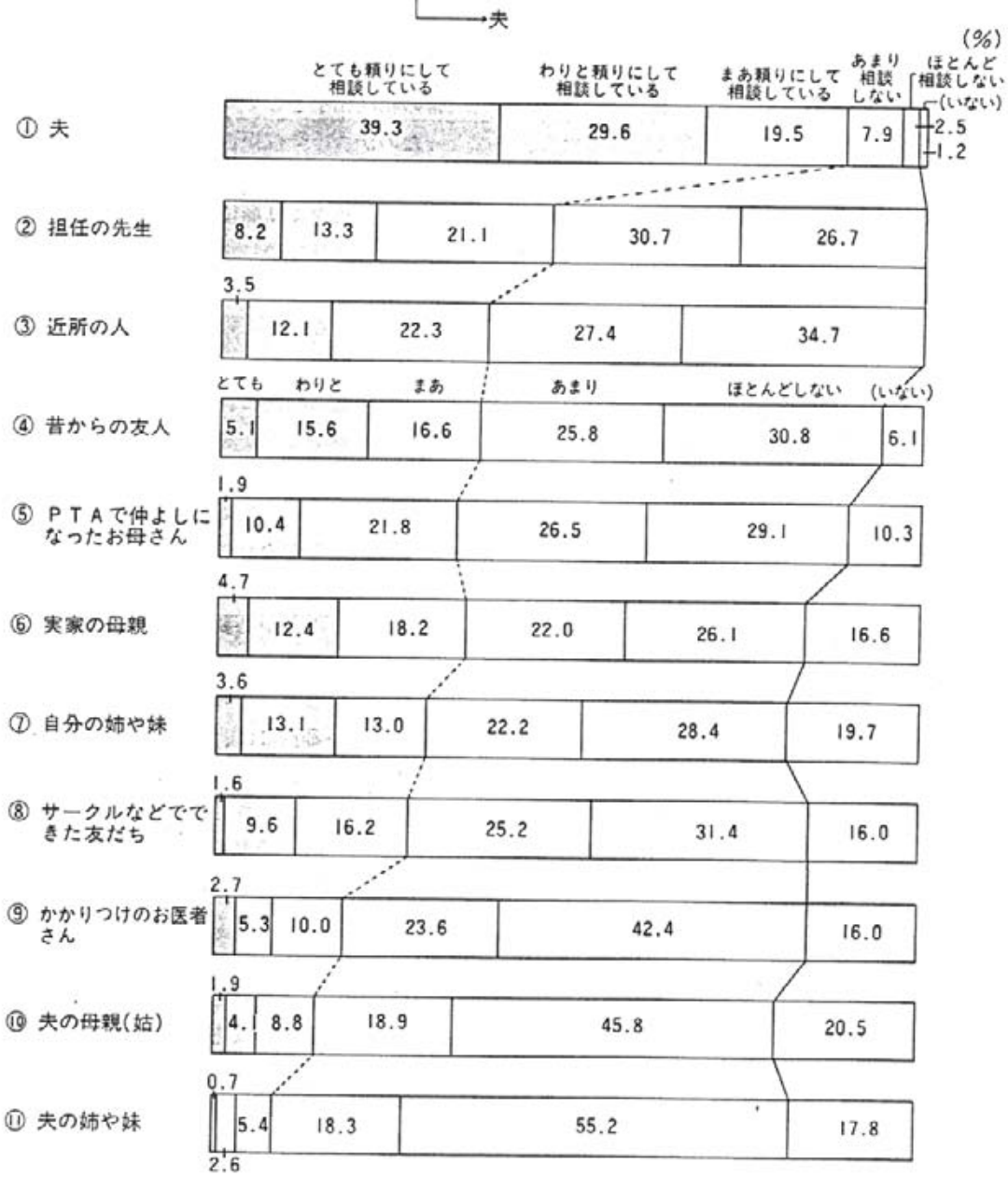


よる情報であることがわかる。「新聞・雑誌」「本」「テレビ」などのマスメディアによる情報はいまひとつ参考にされていないし、最近しばしば開かれている「家庭教育学級、講演会」を、とてもよく聞きに行く母親はわずか3％、「わりとよく行く」を加えても、15％に達しない。社会教育関係者は、どこにこのような学習機会の低利用率の原因を見いだすのだろうか。

さてそうした個人的な情報こそが、母親たちの信頼の対象であるとすれば、その中でもだれからの情報が最も信頼され、利用されているのだろうか。すなわち母親がいちばん信頼している相談相手はだれなのだろう。

図22から、これはもうダントツに「夫」であることがわかる。夫を「とても・わりと頼

図22・頼りにしている相談相手



りにしている」母親は69%にものぼり、これと「まあ頼りにして相談している」を加えると88%。2位以下をぐんと引き離している。つぎはかなり数字が低下するが、先に情報源としてトップに上っていた「担任」、ついで3位の「近所の人」「昔からの友人」「PTAで知り合った友人」となる。意外に順位が低いのは、「実母」や「実の姉妹」で、育児にあたっては、昔から言われているように、「遠くの身内より近くの他人」、すなわち地縁が意外に頼りにされているようだ。おもしろいのは、夫の母親（姑）や夫の姉妹（小姑）の位置の低さで、なんとなくその関係の冷ややかさがうかがえる数字である。

## ■もし登校拒否が起こったら

相談機関への信頼感のうすさ

さて、もし仮りに一般的な育児相談の範囲を越える重大な問題、たとえば「登校拒否」などの問題行動が子どもの身に起こったら、いったいだれの助言が役立つだろうかという設問で、身近な人びとの専門的な知識や相談相手としての力量の評価をみようとしたのが図23である。

ここでの順位は、図22の結果とほとんど変わらない。母親たちがいつもよく相談している相手には、それなりの専門的な課題解決能力もあると評価がされているようだ。

しかし細かくみていくと、おもしろい数字もいくつかある。図22でみたように、相談相手としての夫と担任との数字の開きは大きかったが、図23の「助言がためになるかどうか」では、両者の差はぐっと縮まっている。つまり担任に対しては、教育上の問題についての専門的な力量（登校拒否に関する指導力）を評価していることが推測される。ただし夫との差は縮まったものの、夫を越える数字ではない点にも留意しておかなければならないだろう。登校拒否をわが子が起こした時に、「非常に役立つ助言をしてくれるだろう」とする者は、夫の場合で35%、ところが担任の場合は、27%でしかない。こうした特殊な状況では、担任の力量は、専門家としてもっともっと評価されなければならないのではなかろうか。いわば「素人」である夫に対する評価の数字を（図22に比べ接近はしたものの）担任の数字が下回るようではこまるのだ。

そうした意味では図22にあったように、日常の相談相手としての「近所の人」は3位だったのが、「登校拒否に役立つ助言をする能力」に関しては、図23にみられるように友人や実家の母親より順位が下がっているのがおもしろい。日常のしつけや教育に関する相談相手とはなっても、専門的なことになると頼りにはならない、という評価なのだろう。

さて図24は、そうした重大な問題が子どもの身に起こった時に、専門的な「相談機関」を利用するかどうかをみたものだ。登校拒否に限らず、子どもが重大な問題行動を起こしたら、できるだけ早く専門家（教育相談所や児童相談所などの）に相談し、担任と専門家と親の三者の連携プレーで子どもの治療や教育にあたることが必要なのは当然だろう。しかし、わが国では、現在これだけ教育問題に社会的な関心が寄せられ、高い教育水準が確保されている割には、こうした問題行動の相談機関、治療機関が少ないのが不思議なことの一つであろう。さらに不思議なことは、この図によれば、子どもが登校拒否というやっかいな問題を起こしたと仮定させても、なぜかまだ「絶対行きたくない」層が、2%だがいるし、「できれば行きたくない」を合わせると、相談機関嫌いと言うべき層は21%にも達する。一般的な反応としては「ある程度こまったら行く」で53%。心理臨床や教育の専門家が理想とする「早い機会に相談に行く」者は、4人に1人しかいない。

なぜこうも相談機関が敬遠されるのだろう。たとえば病気になったら、とくにそれが難しい病気の場合、だれでもためらわずに医師のもとへ行く。むろん「医者嫌い」がいないわけではないが、それはごく一部だろう。しかし問題行動の場合、なぜこうも、相談機関嫌いが多いのか。相談所関係者はこのへんにメスを入れ、対策を考えなければならないところだろう。

図23・もし、子どもが登校拒否を起こしたら
→ためになるアドバイスをしてくれる人

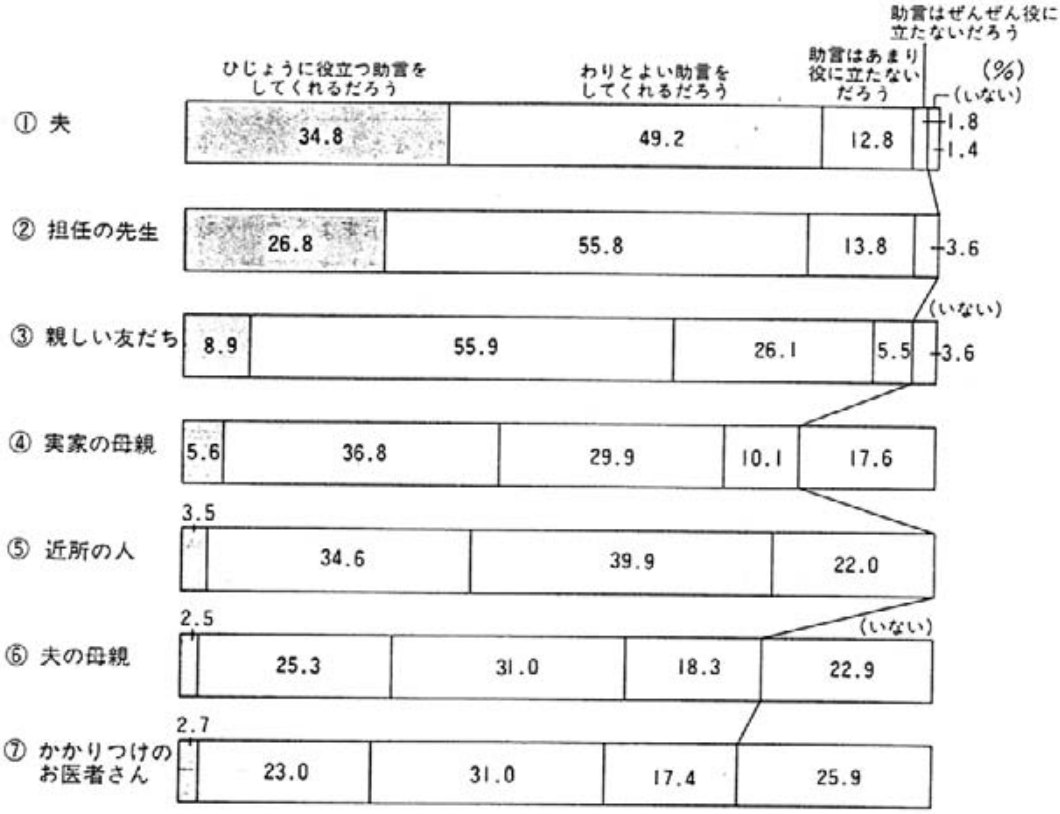
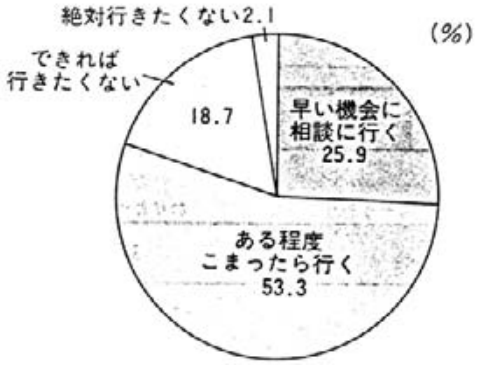



図24・もし、登校拒否を起こしたら
→相談機関へ相談に行くか



## ■父親の役割

だれよりも頼りにしている存在

このようにみてくると、父親不在の時代と言われる一方で、現代の母親たちの子育ては、だれよりも父親を頼りにし、父親を相談相手として行われている気配が浮かび上がってくる。非行をはじめとする問題行動の温床が、崩壊しかけた家庭にあるとされるのは、問題のきざしがみえた時に、夫婦が相談し合って適切な対応ができなくなる点にもあるのではなかろうか。

そうした角度から図25をみてみると、「①家族そろって夕食を食べること」は思うにまかせないものの、「②子どものようす」などについては、毎日もしくはそれに近く夫婦の間で話題にしており（合わせて65%）、「③子育てについて夫婦間で意見がくい違う」ことがないわけではないが、「④夫は子ぼんのう」（とても・わりとを合わせて72%）という状況が、非行をはじめとする問題行動を、他の国国に比べると今でもそれほど多発させずに抑えておくことを可能としている条件なのかもしれない。

育児においてこうした夫との関わりの重要さを示すデータが図26である。登校拒否の設定をした時、夫婦で子どものようすを毎日話題にするかどうかと、夫の助言の有効性の評価との関連をみている。

図が示すように、夫婦でよく子どものことを話題にしている場合ほど、夫の助言の有効性が評価されている。このことは図27に示されているように、子どものことをよく話題にする父親は子ぼんのうで、夕食にも一家そろってのだんらんがある。そうした中で、育児のノウハウについても、父親に対してその力量への信頼感が生まれてくるのであろう。

### 図25・子育てへの夫の関わり

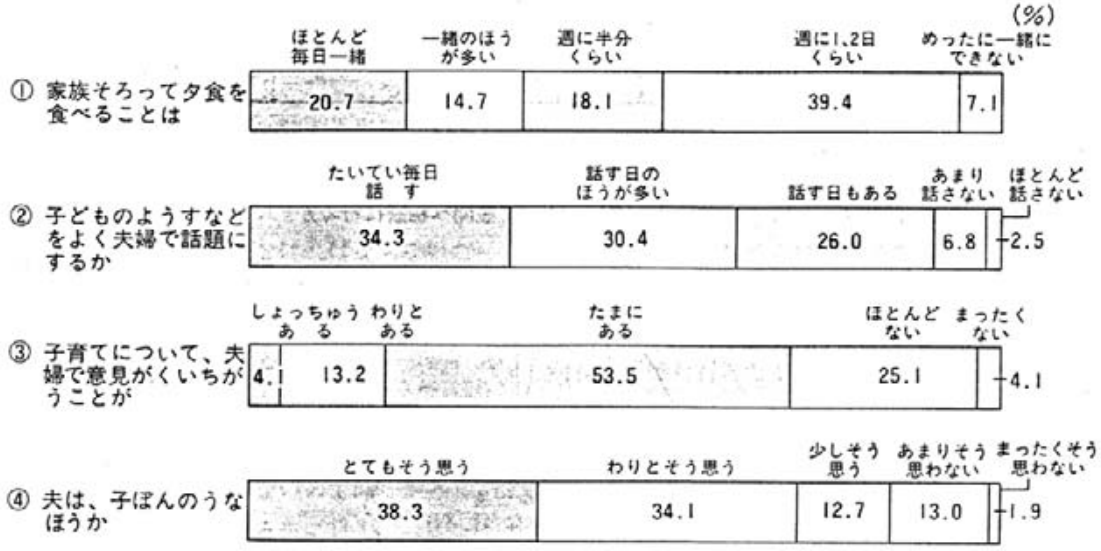


図26・夫婦の話題×夫への信頼

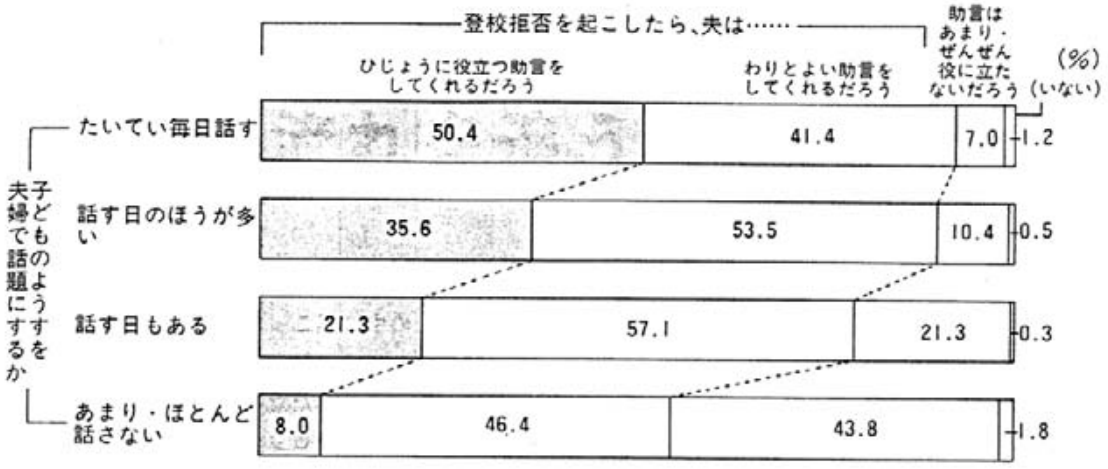
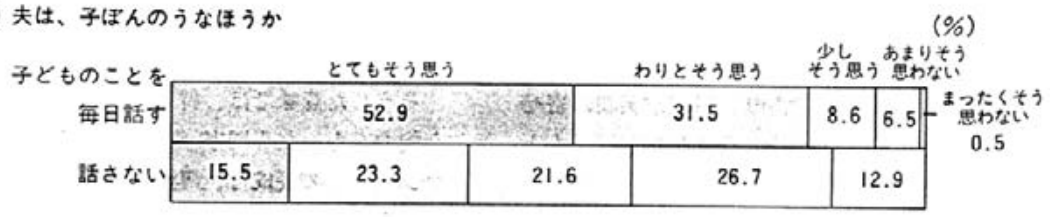
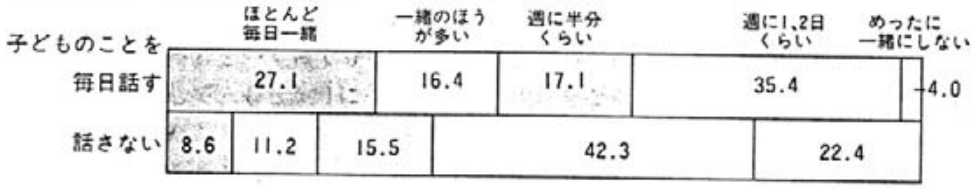



図27・夫婦で子どものことを話題にするか×夫の子育てへの関わり

① 夫は、子ぼんのうなほうか




② 家族そろって一緒に夕食を食べるか



# まとめに代えて

問題行動の漸次増加に対し、将来に向けて専門家の養成、
相談機関の増設が望まれる

＊

本レポートで扱ったデータが語るのは、現代の子育ては、大方の母親たちにとって、まあまあ満足できる結果を生んでいる作業であるらしいこと、子どもの学力に関する悩みはかなりの母親がもってはいるものの、健康上のトラブルはむろんのこと、いわゆる問題行動とよばれるトラブルとはほぼ無縁に育ってきている子どもたちが多いこと、などである。現代の子育てはそうした意味で、少なくとも小学校段階までは、ほぼつつがなく行われていると言えそうだ。

そうしたつつがない子育ての背景にあるものは、子育てに際してよき相談相手の役割を果たす父親の存在であり、母親が父親に寄せる信頼感なのであろう。そうした信頼のもとには、教育相談所や児童相談所の利用など思いもよらない、という状況も生まれてくるのは当然かもしれない。

しかし相談相手としての父親は、重大な問題が子どもの中に起こった時に、これを根本的に解決するだけの能力をもっていないのは当然である。そうした意味では、教師もまたクリニカル・サイコロジストではない。子どもの発達が軌道をそれないように、予防的に教育することは、教師の役割として期待されるところだが、問題が起こった時には、より専門的な治療的関わりが必要となる。たとえ現在は、一般の子どもたちの間で問題行動の発生率はごくわずかだとはいえ、ここ十数年をふり返ってみれば、確実に増加の一途をたどっている。

そうした意味では、将来に向けてより十分な能力をもった専門家（クリニカル・サイコロジスト）の養成と、専門の相談機関（チャイルド・ガイダンス・クリニック）の増設を望みたいところである。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。